

# (翻訳) 世界史研究の新しい局面の打開に関する 幾つかの課題<sup>注1)</sup>

植 松 希久磨

## Some Thoughts on the Creation of a New perspective to World History

UEMATSU Kikuma

当面、中国情勢と世界情勢の新たな発展は、世界史にたいする研究を強め、それを新しい水準に高めることを要求している。

まず、中国の四つの近代化を達成するには世界の発展の全体的な趨勢と各国家の独特な発展趨勢を全体的に把握し、各国の近代化の歴史的経験を鑑み、また深く研究することが求められている。

次に、世界は一体となって、速やかに小さくなっており、各国間の経済・政治・文化的連帯関係も日増しに強められているので、中国は世界的な課題の解決に参画しようとするならば、全民族の世界各国の歴史と現状に関する知識水準を高める必要がある。

その次に、世界史研究の理論・方法と内容は新たな発展が続き、世界史研究の世界化が進み、この学科の発展がいかに世界情勢に追い付くか、また世界史の教科書がいかに国際上の新しい学術成果を反映するかといった課題を打ち出している。

これらの課題を解決することはこの学科に関する多面的な問題に及んでいる。しかし、それを全面的に論述することには本文および筆者が任に堪えられないので、本文は当面の国内外における世界史研究の動きに即して、世界通史研究における新しい課題や新しい方法を模索する事を重点的に考え、私見をのべて、歴史学界の大家と読者の方々のご教示を仰ぎたい。

## 一、世界史の共時的発展の研究とマクロ的な研究を強化する

世界歴史をグローバル的な歴史活動と経験として研究することは、近代資本主義興起後に次第に繰り広げられて来たのである。なぜなら人類活動の範囲は次第に拡大して地球全体に及んだのであって、地球全体を一体と見なす世界観も、資本主義がすべての古い地域的障壁を突き破って世界を次第に一体とつなぎ合わせる条件の下ではじめて可能となるのである。著名なドイツ哲学者ヘゲルは、彼の『歴史哲学』で体系となった観念論的な世界史観を見事に論述した。十九世紀以来、総合的なシリーズとなる世界通史の著作が続々と西洋学術界に誕生した。唯物主義の世界史観の基礎を築いたのは、マルクスとエンゲルスである。彼らはその早期著作の中でヘゲルの観念論的思想体系を批判すると同時に、単一個人や単一国家の歴史活動を「世界史的共同活動」において考察を進めて来た<sup>原注1)</sup>のであり、人類史の過程について唯物論的解釈を提供した。それゆえにマルクス主義の嶄新な世界観の基礎が定められた。したがって、彼らはこの嶄新な世界観と生産様式・社会経済形態・階級闘争などの一連の新しい概念にしたがって、原始社会から資本主義社会にいたるその発生、発展と、相次いで更替を繰り返す基本的な歴史法則を探求した。マルクスが人類史の発展法則を発見したことはダーウィンの有機界の発展法則とならんで、全面的な世界史観に対する偉大な貢献である<sup>原注2)</sup>。エンゲルスがその晩年期にドイツの若いマルクス主義者に、わたしどもの始めた世界史の再研究の仕事は後継者が努力して完成することを期待していると述べた。

長年来、マルクス主義歴史学は多くの国家で、程度は異なるが発展してきた。最初には歴史唯物論的探索に重きをおく例が多かった。例えば、ラファルグ (Lafargue)・メーリング (F.Mehring)・プレハーノフらがこの面に重要な貢献をしていた。しかしながら、いかに新しい観点によって世界史教科書を編纂することについては、依然としてより深く探求し、実践する余地のある巨大な仕事である。

本世紀三十年代において、ソ連人民委員会とソ連共産党(ブ)中央委員会がソビエト初期における、具体的・系統的歴史記述のかわりに社会経済形態の抽象的な定義や社会学的公式を使用する傾向を批判していた<sup>原注3)</sup>。五十年代から六十年代にソ連が十巻本の『世界通史』を次々に出版した。これはソ連のそれより前数十年にわたる世界史研究の総合的な成果と言える。このマルクス主義の世界通史システムに対する探索は開拓性をもち、国際学術界で注目を集めた。この本は中国語に訳して出版され、中国の世界史学界に大きく影響を及ぼした。この巻帙浩瀚な世界通史の基本的な枠組みは、社会経済形態にしたがって歴史時期を分け、国別と地域別に歴史的に記述していくものである。ロシアとソ連の世界史における地位を強調し、世界各国の革命運動を強調することが本書の大きな特徴である。六十年代以来、中国が編纂した世界通史教科書は、ほとんどこの基本的な枠組みの縮図であると言える。そして更に深く研究すべき問題としては、いかに世界各国の国別的な歴史を内在的なつながりを持つグローバルな歴史に組み合わせるかということである。

グローバルな世界史(国別史としての外国史ではなく)は、中国にせよ、他の国にせよ、新しい研究領域である。世界史の研究の対象は世界全体であり、上下五千年、縦横数万里、内容が限りなく豊富であらゆるものを網羅しているので、一定の限界と主な研究任務を定めないわけにはいかないのである。長年来、世界各国で出版した世界通史の著作はその多くが国別史と地域史の総和であると言える。最近、周谷城氏がその旧作『世界通史』(写印版)の新序において、自分の見方をもう一度言明したように、「世界通史は国別史の総和ではなく、有機的な統一体であり、ゆえに記述するとき、国別に記述することをなるべく避けて、とくに世界各地の相互的関連の關係に重点をおくべきである。」<sup>原注4)</sup> この「有機的な統一体」という観点は非常に重要である。従来の歴史著作には本民族と本国を中心か主体とする以外のものはないのである。隣の国の歴史に対する研究、それを広げて世界全体の歴史に対する研究は派生的なものであり、本国の歴史を原点とするものである。だから、世界通史の最初の枠は国別史の総和あるいは総合、即ち国別史収集あるいは列国誌と言ってよい。しかし国別史の総和は世界通史とはならないし、「有機的な統一体」も構成できないわけである。人類全体の発展過程としての世界史を書くには、内在的な関連も何もない歴史条件や過程をある統一した世界史の枠に随意に収めるのではなく、人類の歴史がいかに生産闘争、階級闘争と科学実践の発展にしたがって内在的な関連が形成し、全世界の歴史のプロセスに入ったかを書かなければならない。

人類が世界各地に分散して居住していたのであり、長い歴史時期を通じて相対的に孤立していて発展してきたのであり、人々の活動は原始群、氏族、民族、国家などの異なる社会や政治組織の形で行ってきたのである。したがって、世界史の構造は相対的に独立した、平行に発展してきた多元的な世界構造である。十九世紀以来興った、ギリシア、ローマを古代世界の中心、キリスト教文明を世界文明の主体とする観点は偏狭なヨーロッパ中心主義の世界観の反映である。これは世界史の実際に合わないのである。

古代世界は北アフリカ、西アジア、東アジア、中部アメリカなど文明の中心地域を中心に、しだいに発展し拡大してきたのである。それらの文明の中心はいずれも世界史の発展にそれぞれ独特な貢献をささげていた。それらの文明の中心およびその近隣地域は相対的に独立した世界を形成していた。古い大陸の東側では漢唐帝国を中心とし、西側では東・西ローマ帝国を中心として、その間に間接・希薄な経済や文化的つながりがあるだけである。その後、ヨーロッパとアジアの間で引き続いてアラビア帝国、モンゴリア帝国とオスマン帝国が引き興って欧州とアジアとの間の経済的・文化的関係を結ぶ重要な紐帯となっていた。それで東西を貫く大陸は次第に一つと連なってきたのである。

古代世界の農業経済は自給自足なものであり、農牧混合経済の流動性も限りがある。それに対して、遊牧経済と商業経済は不安定性と拡張性を持っている。したがって、古代の各文明中心地域間の交際は少く貿易活動も限られていたのである。たとえ地域が広大な奴隷制であろうと、封建性大帝国の支配であろうと、それはただ外在的な政治と軍事の支配であって

被抑圧民族の経済生活或は生産様式にはほとんど波及できず、それを破壊することもできないのである。最近、呉于廬氏が古代遊牧世界の農耕世界に対する衝撃の歴史的役割について報告を出して有益な探索を行った。<sup>原注5)</sup>この衝撃は歴史を世界的歴史に発展させるのに確かに一定の役割を果たしていたが、生産様式を変えることができないので暴力的戦いと平和的文化交流が歴史の横断的發展に対して果たした役割について、更に研究する価値があると思われる。これは古代世界史の歴史的枠組を設計する時と、各文明地域間の相互関連を考察する時にぶつかった重要な課題である。

十五世紀の始め、中国艦隊がアジア大陸の海岸に沿って西へアフリカ大陸に航行した偉大なる試みは世界史の舞台が大陸から海洋に向ける序幕を切って落とした。しかしながら、今世紀末、コロンブス (C.Clumbus) 新大陸発見と、ガマ (Vasco da Gama) がアフリカをまわってアジアに到着したことと、十六世紀の始めのマゼラン (F.Magellan) の地球を一周したことによって始めて地球東西両側一体の新しい世界像の紀元を切り開いたのである。地理的な発見や商業革命が新興の資本主義要素をつなぎ合わせ、世界史の構造に大きな変化をもたらしてきた。十六世紀に興った最初の西欧商業資本主義の植民主義運動の高まりによって、海外植民地や世界市場の開拓を通してグローバルなつながりを作り、主として、アメリカの大部分の地域とアフリカ沿海地域と東南アジア沿海地域を新生資本主義世界システムに納めたのである。

十九世紀の産業革命による工業資本主義の勝利によって二回目の植民の高潮が勃興した。今回は植民地や商品市場を拡張する方法で西アジア・東アジア・南アメリカ等地域へ奥深く拡張するものであった。十九世紀末より西洋自由資本主義の独裁資本主義への移行によって、三回目の植民の高潮が起った。今回は直接征服や勢力範囲を築き上げることによって世界を分割して、独立あるいは半独立のアフリカ内陸及びアジア内陸の広大な地域を、すべて世界資本主義システムに取り入れていった。帝国主義が世界を分割したことによって、地球は正真正に一体となったのであった。

近代資本主義が打ち立てた世界システムは、資本主義の欧州が世界を支配する中心であり、前資本主義のアジア・アフリカ・ラテンアメリカは国際政治・経済的にヨーロッパに依存する従属的な地位に転落したのである。世界史の構造が大きく変わった最も重要な特徴はここにあると思われる。したがって、ヨーロッパを近代世界史発展の原点とするすべての論説を「欧州中心主義」と一概に批判することはできない。ヨーロッパは近代資本主義の発祥の地と中心地域（後に、北大西洋地域に拡大した）である。近代資本主義世界経済システムを避けて「欧州中心主義」を論議することは意義がない事であり、世界資本主義の中心となるヨーロッパの歴史的地位を否定することも、非歴史主義なのである。しかし、ヨーロッパを中心とする近代資本主義世界システムは実は幾つかの欧州植民大国を中心として世界を幾つかの排他的な政治集団或は勢力範囲集団に分割したのである。それゆえに、対立と統一という矛盾の趨勢はこの有機体に存在するのである。

世界資本主義は一枚岩ではない。その内在的な矛盾が帝国主義国家の分裂、つまり社会主義運動、帝国主義集団内部の分裂、つまり対立した軍事集団と世界大戦、帝国主義世界植民システムの内部の分裂、つまり植民地民族解放運動が起こる事態に導いた。この三つの矛盾のダイナミクスとメカニズムによって資本主義世界システムと旧植民システムの崩壊に導かれ、数世紀以来の世界構造の新しい変化、即ち社会主義世界システムの出現と第三世界の結成が引き起こされた。社会主義世界システムの出現は世界資本主義システムに大きな打撃を与え、旧植民システムの全面的な崩壊を速め、人類の歴史過程に新しい方向を切り開いた。国際共産主義運動と社会主義運動に対する研究は現在でも重大な新しい課題である。

第三世界は最初は新しい世界政治の概念として打ち出されたのである。その後、世界経済また世界史上の新しい範疇と段々発展してきたのである。長年来、世界史はほとんど西洋人によって書かれたので、世界史をヨーロッパを中心とする歴史と書き、キリスト教文明が世界へ伝播する歴史と書くことが当たり前になったのである。考察する視点や使用する資料及び研究する重点などは、植民時代の商人、政治ブローカー、外交家、伝道師より大きな影響を受けている。四十年代以来、ソ連の学者は西洋中心論の偏りを是正するために、植民地付属国の歴史を研究することを提唱した。しかし、現在まで『東方各国近代史』、『アジア・アフリカ各国近代史』などのような著作以外は全体として植民主義史を論述するものは殆ど見られない。世界資本主義の歴史過程を離脱して植民地付属国の歴史過程を論述するのであれば、多くとも植民略奪の事実を羅列するだけで、世界関係の内在的法則を明らかにすることができないのである。

ここ二十年来、西側で「新マルクス主義学派」と呼ばれる学者は西洋の流行の古い歴史の枠組に満足せず、試みをして十六世紀以来全体としての世界歴史研究の枠組と体系を打ち立てようと試みている。例えば、アメリカの歴史学者イマニュエル・ウォーラーステイン (Immanuel Wallerstein) の指摘した「現代世界システム」の論説はヨーロッパを世界資本主義の中心地域として「中心地域」「半周辺地域」「周辺地域」と「周外地域」の間の内在的・経済的関連の変容を研究するものである。この理論は当面の国際史学界に大きく影響を及ぼしている。<sup>原注6)</sup> 最近、アメリカの歴史学者スタフリヤンノス (L.S.Stavrianos) の新著『世界分裂、第三世界の成年期』<sup>原注7)</sup> はウォーラーステインの理論構造をもとにして「全世界市場経済」の概念を用いて、第三世界の歴史を書いたものである。彼は第三世界を歴史実体と見なして十五世紀より現在までの歴史発展の過程を探索した。この研究の動向は注意に値する。中国は第三世界に属し、その重要な構成部分であるので、われわれが中国の特色のある世界通史を編纂するには、いうまでもなくこの部分を特に重要視しなければならない。第三世界歴史の研究でより大きな貢献を捧げることはわれわれの当然負うべき責任である。

第一次世界大戦やロシア十月革命以後、特に第二次世界大戦以後に反植民主義と民族独立運動の潮流が興った。今度は前の数回の植民主義の潮流とちょうど反対の方向、つまり東より西へと回って来た。アジアは革命の最も大きな嵐の源となっている。現在、一連の民族国

家はすでに東ヨーロッパ、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、豪州（中の一部は社会主義国家となっている）に出現した。これは統一した資本主義システムの解体や世界の新しい多様化した情勢を反映している。

しかし、一方では、新しい産業革命の成り行きと世界的経済関連の強化は、世界的関連の大勢を弱めるのではなく、一層強化するものである。ヨーロッパ、北アメリカと北大西洋地域の世界経済と政治における比重は下がる傾向にあるが、アジア・アフリカ・ラテンアメリカや太平洋地域の世界経済と政治における比重は急速に上がって、古い世界歴史の構造は変わりつつある。社会主義の勃興と帝国主義植民体系の崩壊は世界帝国主義に手痛い打撃を被らせたが、このような打撃は主として政治と軍事の面に現れており、経済の面に被らせた損失はそれまで人々の予想よりはるかに小さかった。社会主義国家や新しく独立した民族国家の大量出現も、国際市場の分裂と発達した資本主義国家の経済衰退をもたらして来なかった。反して、違った社会経済体勢、違った社会制度の国家間、違った経済発展水準の国家間においては、経済上の相互関連・相互進出・相互依存の関係は強化される傾向にあった。国際経済と政治に一連の、一層深く研究するに値する現象が現れた。たとえば、資本の国際化、多国籍企業、共同市場、政治的・経済的共同体等などがそれである。歴史の実践で示したように、世界史の横断的發展は、その縦の發展と同様に非常に複雑な動態を呈し、マクロ的な歴史学に豊富な研究課題を提供した。

建国以来、中国の世界史研究は世界通史と国別史（地域史と兼称）の二類に大別する。課題的研究はかなり弱く、世界史の横の發展に対する研究も足りなかった。世界通史の枠組は、縦の運動に重きをおいたが、ある歴史段階における多国家や多地域に対する総合的な研究はかなり弱く、それらは国別史総和の枠の束縛を受けるものか、あるいは片面を持って全面を解するものであった。この面で最近、国際学術学界が多国家・多地域の課題に対する総合的研究において發展を見せたことは、注目すべきである。世界史上の多くの重大な政治・経済と文化の歴史事件、例えば、宗教改革、啓蒙運動、ブルジョア革命、産業革命、農業革命、農民運動等などは、既に個別国家の国別史の研究に限るのではなく、多国家・多地域間の総合的比較研究を行い、これらの重大な歴史事件が発祥地から世界への發展・伝播の過程及び相互の影響を探索しているのである。換言すれば、歴史の縦の發展を横の發展と結び付けて研究を行い、国別史の時間と空間的歴史の枠を打ち破った。フランスの歴史学者F・ブローデルの『フィリッポス2世時代の地中海と地中海世界』<sup>原注8)</sup>は取材が豊富で、筋道が一貫しているもので、このような総合的マクロな視野での研究の開拓的な力作だと称賛されている。

この本の考え方の是非をここで論ぜず、この本で取り上げた全体的視角や総合的分析方法は、世界史の研究が分析から総合へ、マイクロからマクロへの趨勢を表している。これもまた当面海外の社会科学と自然科学研究の共通した新しい趨勢である。われわれは世界史、特に世界通史の研究や教育に新しい道を開き、特出した成果をおさめるためには、このような総合的研究の成果を基礎としなければ、とうていできないことである。いかなる学科も時代

にしたがって発展しなければならない。世界史という学科について言えば、世界は統一した歴史過程に巻き込まれていけばいくほど、この統一した歴史過程に対する全体的研究、世界各地域、各国家の共通した歴史法則の共通性と個別性に関する研究やグローバルな関連性の研究がますます強化されるようになる。それに加えて、世界中の国がますますふえるにしたがって国際業務も日増しに繁雑になり、世界史の範囲もますます広まるので、もとの方法で教えていけば世界通史授業がその負担に適えないのが当然である。

世界史の全体的発展過程にたいする研究を強化することは、国別史研究や国別史総和の研究方法与区別できるようなマクロ歴史学を形成する可能性がある。研究対象の違いによって、理論と方法も当然に新しい発展がある。これは何も新しい主張を標榜し、異議を立たせるのではなく、マルクス主義の世界史研究の基本的な方法はもともとマクロ的な方法なのである。その方法はある国家またはある地域を中心として世界を見るのではなく、人類史の共通した法則と全体発展の趨勢から世界及びそれぞれの国家を見るのである。マルクス主義の広義的政治経済学と社会発展史(惜しいのは長年来国際学術界の重視を得られなかったもの)は、すでにマクロ歴史学に理論と方法を提供した。マクロ歴史学の研究を展開するには現代科学のシステム論と比較歴史学の方法論及びその他の学術成果を取り込むのが当然のことである。この課題の提起は国別史研究の重要性を否定することを意味しない。世界各国についての研究は世界全体研究の基礎であり、基礎が強固でなければ、マクロ歴史学という「ビルディング」が立たないのは言うまでもない。

## 二、重大な現実的意義をもつ歴史課題に対して創造的新しい探索をすべきである

世界史発展の趨勢は近現代に近付いて来れば来るほど、人類の活動領域と範囲が広くなり、階級闘争、生産闘争、科学実践の発展も豊富で複雑になる。しかし、現在の世界通史の教科書に含まれる内容は近現代になればなるほど狭くなり、簡素化している。この面で、大きな改革を行わなければ、世界史学科の発展に不利であるばかりでなく、近代化教育のニーズにも適さないものであり、海外の世界史研究の最新成果を吸収することも難しいのである。

これ以前のある期間に、世界古代史の内容の及ぼした知識面がまだ広がった。その中に生産道具の発展、科学技術の発明、経済生活、政治制度、王朝戦争、文化発展と交流、宗教習俗、民族変遷、および哲学、文学と芸術分野の成果等が含まれていた。近代世界史に至っては、その歴史の内容の及ぼした範囲が狭くなり、重大な経済課題として残った工業革命以外は、すべての歴史過程はほとんどブルジョア革命、労働者運動、植民地略奪と民族解放運動といった政治史の枠、つまり階級闘争の枠の中に収められたのであった。世界現代史になると、その歴史の幅が更に狭くなる。ある時期に、階級闘争という「綱」が、すべての「目」に取って変わり、無限に豊富で、矛盾が複雑に入り込んだ現代世界は「革命」(社会主義革命、反帝闘争、民族解放運動)という中身の無い殻となった。このような世界史の枠をよく見る

と、古代史は大体文化史あるいは政治文化史をメインラインとし、近代史は大体政治史をメインラインとし、現代史になると、ほとんど革命史しかメインラインとしなくなったのである。したがって近現代史になると、世界で、重大な革命闘争や重大な戦争が起こった国家以外は、世界史の一席を占めることができなかった。このような国でもその平和発展時期がこの「枠組み」に収められない。換言すれば、国別史の総和としての世界史の枠は、世界現代史の範囲で文字どおりの各国革命史の総和にほかならない。

このような世界史の枠組みを作り上げた原因は多数にあると思われる。中にソ連世界通史システムがもたらしてきた影響は、ここで論ずる必要もない。

思想を解放して、この狭まった枠組みを打破することは世界史学界の一致した声となった。しかし、完璧な枠組を設計するには、理論と実践の統一のうえでマルクス主義の世界史に関する科学体系を正確に全面的に理解するばかりでなく、多くの新しい重大な歴史課題に対して新たに創造的な探索を行わなければならない。

前に言及したように、歴史が資本主義時代に入ってから、「ますます広がって、全世界の歴史と形作られたのである」<sup>原注9)</sup>。しかも、マルクスとエンゲルスも資本主義の歴史に対する解剖から始めて自分の新しい世界史観と理論体系を打ち立てたのである。マルクスが「資産階級社会は歴史上最も発達した、複雑な生産組織である。したがって、その種々関係を表す範疇およびその構造に対する理解は、われわれにすでに滅亡した社会形態の構造と生産様式を透視させることができる。……人体解剖は猿体解剖の鍵と見なせる。」<sup>原注10)</sup> マルクスが資本主義の生産組織に対して解剖を行ったばかりでなく、資本主義の生産様式の由来を考察して、それが必然にその自身の発生、発展と衰退の過程を通じて、より高級の社会形態へ移行する趨勢を指摘した。

しかし、注意すべきことは、マルクスは資本主義社会がもっとも発達していて複雑な社会であると指摘していると同時に、そのまた一つの特徴「現在の社会は強固な結晶体ではなく、変われる且つ常に変わっている過程にある有機体である」<sup>原注11)</sup> ことを指摘している。このことが世界史研究に対する重要な指導意義をもち、そのあるべき評価を得られなかったようである。それで歴史実践の発展にともなう近現代世界歴史理論の発展が影響を受けるばかりでなく、現代世界の多くの新しい現象に対する全面的・科学的総括にも影響され、しかも、歴史上既に死亡した社会経済形態の全過程に対する深い研究にも影響される。

鄧小平氏がわれわれの社会科学の研究は(比較できる面で言えば)外国より遅れており、世界政治の研究は長年来おろそかにされてきた<sup>原注12)</sup> と明らかに指摘している。

制限分野が多すぎて関心と支持が少なすぎるので、重大で現実的な意義をもつ世界現代史は恐れるような研究分野となっている。これは重視すべき問題である。鄧小平氏が言われたように、「われわれはマルクス主義の大きな政党であるが、われわれ自信でさえもマルクス主義の研究を重視せず、実践の発展によってマルクス主義の前進を推し進めなければ、われわれの仕事はどうしてうまく行くことができよう。」<sup>原注13)</sup>



当面我国の四つの近代化に直接的・現実的意義をもち、従来の歴史研究にも推進作用を果せる世界史研究の課題のひとつは、近代化に関する理論的・歴史的研究なのである。近代化問題(modernization)は、60年代以降西側歴史学・経済学・社会学の研究で使い始めた新しい理論と歴史概念である。第二次世界大戦以降、新しい科学技術革命が工業の発達した国の経済発展にとってであろうと、発展途上国の経済発展にとってであろうと、ますます大きな役割を果たしてきた。社会物質生活の変化も今までいかなる歴史時代よりも遥かに速い。フランスを例(西側の工業の発達する国で経済発展が比較的遅い例)にすれば、計算によれば、二百年前(1780年)、フランスの一人当たりのG N Pが320 フラン(1905 ~ 1913年の価値によって計算する)であった。

それから八十年後倍増した。それから六十年経ってまた倍増した。1929年の世界経済大恐慌でその増長の勢いを約20年抑えていた。しかし、それからの二十五年間に2倍増長した。

フランスでは、1875年に1キログラムのパンを得るには、1時間43分間の仕事をしなければならなかったが、1980年になると、10分間すれば結構であった。同様に、ハムを1キログラム得るには19時間の労働の所得が必要であったが、1980年になると、1時間52分だけの労働所得で得られるのである。フランスの女性の平均寿命は1780年においては28才であったが、1880年には44才で、現在では78才を越えた。現在のフランス人の平均身長は1.74mで、百年前より10cm高くなっている<sup>原注14)</sup>。

もう一つ後進から先進への変身の例を挙げてみよう。日本は19世紀50年代以前までは鎖国の後進の農業国であったが、明治維新以降の30年間に西洋に習って富国強兵の政策を推し進めることによって一挙にアジアの第一工業大国に躍進した。第二次世界大戦後、日本の敗戦で植民地(面積が戦前領土の半分に当たる)をすべて失い、工業が戦前の七分の一にさがり、一人当たりのG N Pは162 ドル(1952年)だけであった。また日本は資源に乏しい国であった。しかし、日本人は敗戦後の歴史条件のもとに改革を実行し、一連の経済高度発展の奇跡で世界を驚かせた。1953年から1972年にかけて、日本の工業生産は平均に13.1パーセントの速度で増長していた。それと同じ時期にソ連の工業生産の年平均増長速度は7.7パーセントであった。<sup>原注15)</sup> 1960年ごろ、アメリカのG N Pは日本より13倍高かったが、1977年になると、2.7倍となった。

現在の日本の工業生産総額は10000億ドルを超え、全世界工業生産総額の10パーセントを占め、他の資本主義国家を追い越し、アメリカに次ぐ経済超大国となった。予測によれば、1990年に日本の一人当たりのG N Pはアメリカを追い越すことになりそうである。80年代より日本は「技術立国」の道を歩み始め、創造的な科学技術の開発を追求することを将来の「立国」の原点と見なした。

日本の近代化の成功した経験は、経済発展特に第三世界発展途上国の経済発展を研究する世界各国の専門家の注目を引きつつある。鄧小平氏がある講演で特に日本の近代化の歴史経験にふれたことがある。「日本人は早くは明治維新の時から科学技術や教育を重視し、それに

大いに力を入れた。明治維新は新興ブルジョアの近代化だが、われわれはプロレタリアだから、かれらより一層よくやるべきでもあるし、可能なことでもある」<sup>原注16)</sup>。

現在、国外特にアメリカや日本では、当代の世界経済発展と発展途上国がいかに近代化を実現するかという必要性から出発して、現実から歴史にさかのぼって新しい世界史研究の分野—近代化の歴史研究—を切り開いた。当面各国の研究者では「近代化」に対して、みんなが認める一致した解釈がなく、研究する方法もまちまちで、比較的成熟した理論体系がまだ形成されず、研究する政治的目的も異なっているが、近代化を世界近現代史の新しい研究項目として、学際的な比較研究を行うことが現実的な意義をもつものである。これは現実から歴史への再認識、再検討のアプローチとでもいえよう。

総じて言えば、当面の西側学術界では、近代化に対する研究は主として経済学・政治学と社会学の三つの視角から行われている<sup>原注17)</sup>。これらの研究には、アメリカのプリンストン大学国際研究センターのブラック教授の研究サークルから二例が提供されている。ブラックが1966年に出版した『近代化のダイナミックス、比較歴史の研究』<sup>原注18)</sup>では、世界史の近代化の過程を研究する理論的枠組みと分析モデルを提出した。彼の手配によって、ロシア史・日本史・経済学と社会学などの分野の専門家から組織された八人のサークルは、1975年に『日本とロシアの近代化、比較研究』を出版した。これは日本とロシアの近代化の歴史の比較研究の著作である。つづいて彼がまた四大学の多学科の専門家からなるサークルをつくり、1981年に『中国の近代化』<sup>原注19)</sup>という本を出版した。

これはおそらく西洋人が中国の近代化の歴史全過程を研究する最初の著作であろう。この二書はいずれもブラックの近代化の歴史的枠組み、前近代化時期・転換時期・高度近代化時期（『中国の近代化』が第三時期に言及しなかった）にしたがって、近代化の横断的発展（国際背景・政治構造・経済構造と経済成長・社会相互関係・知識と教育の五つの面にわたる）と結び付きつつ、比較研究を進めたのである。日本とロシア両国の歴史条件と国家の大きさが甚だ異なり、両国の近代化の方式も差が大きいにしても、各自の方式を通して高度な近代化を実現した。中国と日本の社会歴史の条件が比較的似通っており、西洋に接し近代化を求める時期も近いので、比較研究を行うことはより大きい意義をもっている。上述の二書でわれわれの参考となるのは比較歴史研究の方法である。

これらの著作およびそれと類似の近代化の研究は、その基本的な理論が近年来西側で流行っている行為科学の理論であり、研究の中身は科学技術が近代国家の近代化の原動力だとか、孤立して一面的に強調するものが多く、社会制度が違うという重要な区別を抹消し、その中に歪曲や誤解さえもあり、研究のモデルは西側国家の近代化を基準とすることから抜け出せないものである。およそこういうものが当面の西側学術界の近代化研究の基本的な弱点であるので、これらの著作を批判の目で読むべきである。

正に「第三世界」という新しい政治経済の概念が世界史研究に新しい研究課題を打ち出したと同様に、「近代化」が新しい歴史範疇として新しいマクロな視角から世界近現代史の発展

に対するわれわれの視野を広げた。「近代化」という歴史範疇は第二次世界大戦後に提出されたものであるとはいえ、近代化の構成部分としての「工業化」の歴史過程というものは、早くからマルクス主義歴史学の重視した研究課題となった。マルクスが『資本論』の第一巻第十三章「機械と大工業」で、近代大工業が人類の歴史発展の段階で果した偉大な革命的な作用については輝かしい分析があった。

彼が「近代工業の技術基礎は革命的なものであるが、従来の、すべての生産様式の技術基礎は本質から言えば保守的なものである。」と指摘している<sup>原注20)</sup>。彼がイギリスを例に資本主義生産の自然法則を解明したうえで、問題はこの法則による社会対抗の発展程度にあるのではなく、「問題はこれらの法則そのものにあり、これらの確固たる必然性が働いていて、実現しつつある趨勢にあるのである。工業の発達した国家が工業の比較的遅れた国家に示したのは、ただ後者の未来像にすぎない。」<sup>原注21)</sup>と指摘した。

マルクスが19世紀半ばに指摘した「未来像」は、20世紀半ばになって大きな変化が起こった。今日の工業の発達した国家は19世紀半ばの工業発展水準と比べれば、識別できないほど大きく変わり、現在の先進国と発展途上国との差の激しさは、百年前よりも驚かされるものとなっている。第三世界の人民の90パーセントの収入はアメリカ水準の10分の1にも至らない。

第一世界と第二世界の人口は世界総人口の28パーセントに過ぎないが、世界国民総生産の80パーセントも占めている。アメリカは世界人口の6パーセントしか擁していないが、しかし、世界国民総生産の32パーセントをも占めている<sup>原注22)</sup>。現代生産力の発展は19世紀の「工業革命」や「工業化」などの概念に含まれていた内容を遥かに超えており、新興の発展経済学では「発展」(development)・「発展戦略」などという特定の新しい概念が打ち出された。それゆえに、さまざまな経済発展と成長の理論や「発展経済学」が生まれたのである。同様に、その中から新しい「近代化」の概念と理論も打ち出されたわけである。

この新しい歴史概念の意味範囲は「工業化」よりずっと広く、更に長い歴史過程における、前工業社会(伝統社会)と照合しつつ発生した生産力・経済構造・消費様式・政治・社会と思想の各方面にわたる全面的な変革を包括しているのである。近代化の過程は異なる各段階を含めているが、ある発展段階ではない。近代化の研究は工業革命と工業化を含んでいるが、工業革命と工業化の研究は近代化が含まれていない。こうした意味で言えば、近代化の研究は当面の世界近現代史のわくに納まった内容を豊富にしたと言えよう。当面の問題は近代化という研究課題の必要性を検討することではなく、この、当代世界各国人民の利益と密接にかかわっている問題がすでに現実的な存在となっている。さしあたっての問題はいかに力を動員させて、我国自身の研究を展開しマルクス主義の近代化の理論を打ち立てることにあると思われる。

西側のフルジョアジーの近代化の理論は技術の進歩を要とし、いわゆる四回の産業革命の概念は技術がすべてを決定することを強調したものである。新しい近代化の理論はマルクス

主義の生産力と生産関係に関する理論・土台と上部構造の理論を要として経済史から手を入れ、原始的蓄積・商業資本・工業資本から独占資本にいたる各段階についてより深くより全面的な研究を強化しなければならない。研究をする中で西側の多学科・多視角的な研究方法を取り入れるべきだが、ヨーロッパを代表とするモデル（また日本モデルもいれて）を打破し、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ及び世界の他の地域の状況によって歴史的・具体的に分析しなければならない。われわれが進めている社会主義近代化は西側モデルを打ち破るものであり、ソ連モデルをも打ち破るものである。歴史は限りなく多様なものであって統一した発展のモデルはない。

かつてマルクスの西欧資本主義の原始的蓄積についての歴史的な論述を世界史上原始的蓄積の唯一のモデルとする説に対して、マルクスがその間違いを指摘して反駁した。「かれは私の資本主義の起源についての論述を一般的発展の過程といった歴史哲学の理論に徹底的に変え、すべての民族はその歴史の環境のいかににかかわらず、必ずたどらなければならないこの過程、つまり、最終的に社会労働生産力の高度発展を保証すると同時に、人類の最も全面的な発展をも保証できる境地にいたるといような経済形態に変えた。しかし、彼に了承してもらいたいことに、このようにしてこそ、私にあたえられた光栄が多すぎたと同時に、私に少なからずの侮辱もあたえられたと思う。」<sup>原注23)</sup>と、マルクスが指摘した。それと同様に、マルクスが西欧の商業資本・工業資本等等について行った歴史的な論述も、既成のモデルや結論を提供するものではなく、世界の他の地域の同類現象を研究するために指導的な思想を提供しただけである。

重大な現実的意義をもつ歴史的課題を考察するには、必ずマルクス主義の歴史理論に対する理解にかかってくるし、新しい理論問題も生ずるであろう。近年来、国内学術界では歴史発展の原動力をめぐってくりひろげた討論がよい発端ではないかと思われる。この問題の實質は歴史の発展過程における階級闘争と生産闘争の相互関係を問うことである。理論的探求の空気がなく、理論のレベルアップを先行させなければ、世界史研究の新しい局面を開拓することは想像もできないことである。全面的に唯物論的歴史観を発揮し、「歴史発展の合力」を科学的に分析して、一層完璧な世界通史システムを構成するためには、多くの世代のマルクス主義史学者の長期にわたる努力を重ねなければならないのである。この探求の過程においては世界各国の歴史についての個別的に深く研究する必要があるばかりでなく、世界経済史・世界文化史・世界軍事史・国際関係史等々についての総合的に深く研究することも必要とするのである。歴史の新しい時期のニーズと世界学術の新しい発展に応じて、新しい世界史の枠組を考え探求する勇気を奮い立たせ、たとえ失敗しても進めて行くべきである。このようにしてこそ、新しい局面を開拓することに役に立つのであろう。

## 注

- 原注1) マルクスとエンゲルス「フォイエルバハ」,『マルクス, エンゲルス選集』第一巻 p.42.
- 原注2) エンゲルス『マルクス墓前での演説』,『マルクス, エンゲルス選集』第三巻 p.574.
- 原注3) ソ連人民委員会とソ連共産党中央委員会のソ連各学校における本国歴史の教授についての決定, それを紹介するのは『マルクス主義の古典的作家が歴史科学を論ずる』(人民出版社編集部編, 1961 年版, p.287 ~ p.291) を参照。
- 原注4) 周谷城『世界通史』 写真版新序, 1983 年, 上海書店, p. 1 .
- 原注5) 「呉于廬が世界歴史上の遊牧世界と農耕世界を語る」,『世界歴史』, 1983 年第一期
- 原注6) I・ウォーラースティン『現代世界システム, 資本主義農業と16世紀ヨーロッパ世界経済の源』(Immanuel Wallerstein, The Modern World System・Capitalist Agriculture and the Origins of the European World Economy in the Sixteenth Century, 1974),『現代世界システム・, 重商主義とヨーロッパ世界経済の強固, (1600 ~ 1750)』(The Modern World System・, Mercantilism and the Consolidation of the European World Economy, 1600 ~ 1750, 1980 年)
- 原注7) スタフリヤンノス『世界分裂, 第三世界の成年期』(L.S.Stavrianos, Global Rift, the Third World Comes of Age, 1981)
- 原注8) この本はフランス語・スペイン語・英語等の訳本がある。英語の訳本は Fernand Braudel, The Mediterranean and Mediterranean World in the Age of Philip・, 2vols, 1972 ~ 1973 である。
- 原注9) マルクスとエンゲルス「フォイエルバハ」前掲書 p.51.
- 原注10) マルクス「政治経済学批判序言」『マルクス, エンゲルス選集』第一巻 p.108.
- 原注11) 『「資本論」 第一巻第一版序言』,『マルクス, エンゲルス選集』第二巻, p.208 (底線は引用者が付けたもの)
- 原注12), 13)『四つの基本原則を堅持する』,『鄧小平文選』p.167.
- 原注14) フィリップ・レセニエール「経済増長二百年」フランスの『発展』月刊, 1982 年10月号, 中訳文は『世界経済訳叢』1983 年第6期に掲載。
- 原注15) (C.E.Black, et al, The Modernization of Japan and Russia, a Comparative Study, 1975) p.292.
- 原注16)『知識を尊重し、人材を尊重する』『鄧小平文選』
- 原注17) 発展経済学とは二次世界大戦後に現れた経済学の新しい分野である。これは発展途上国の経済を主な研究対象とする。ハゲン『発展経済学』(Everett E. Hagen, The Economics of Development, 3rd ed. 1980) 参照。
- 原注18) Cyril E. Black, The Dynamics of Modernization, a Study in Comparative History, 1966.
- 原注19) ロスマン編『中国の近代化』(Gilbert Rozman (ed.), The Modernization of China, 1981.)
- 原注20) マルクス『資本論』,『マルクス・エンゲルス全集』第28巻, p.533.
- 原注21) マルクス『「資本論」 第一版序言』,『マルクス・エンゲルス全集』第23巻, p.8. (黒点は引用者が付けたもの)
- 原注22) ホロヴィッツ『発展中の三つの世界』(L.Horowitz, Three Worlds of Development, the Theory and Practice of International Stratification, 2nd ed. 1972), p.23.
- 原注23) 『「祖国紀事」 雑誌編集部への手紙』,『マルクス・エンゲルス全集』第19巻, p.130.
- 注1) 本翻訳は 羅榮渠著<有開創世界史研究局面的幾個問題> 《歴史研究》1984年第3期の抄訳である。

(うえまつ きくま 本学非常勤講師・中国語)